

被曝農業時代を生きぬく

第18回

茨城県つくば市の(有)なかのきのこ園の飯泉孝司社長
原木シイタケの生産とともに里山再生を目指す(上)



有なかのきのこ園の飯泉社長

を訪ねた。

良質な福島県産原木

なかのきのこ園は原木シイタケの栽培を始めて40年以上になる。飯泉孝司さん(64)は、一代で築き上げた同社を全国最大規模の生産組織に成長させた。圃場面積3.5haにある20棟のビニールハウスで、毎年50万本のほだ木でシイタケを育ててきた。

うちでは原発事故が起きるまで、毎年22、23万本の原木を購入してきました。一度植菌したら、シイタケが取れる間、3年ほど使い続けます。原木はごくわずかに種苗会社が植菌したものを買っていますが、それ以外はすべて福島県産。もう40年以上の付き合いですね。

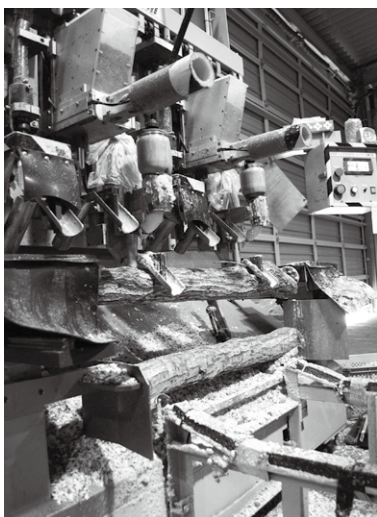
なぜ福島県産を使うかといえば、品質と価格、どちらをとってもほかに及ぶ産地はないから。幹が太すぎず細すぎず、長さもちょうど良い。うちのような大規模経営になると、

植菌するのに機械を使うもんだから、素直な木がどうしても必要になるんです。曲がっていたり、枝の痕跡である節があつたりすれば、機械加工に向かない。福島県は原木を生産するため里山を丁寧に管理しているのだから、他の産地に負けない良質な原木を提供してくれるんです。

原木確保のため全国を奔走

それほど信頼していた福島県産の原木だったが、原発事故をきっかけに供給がストップ。全国で福島県産を愛用していた業者は関係機関に窮状を訴えた。これを

受けて林野庁が2010年11月4日に発表した需給情報によれば、全国で120万本の原木が不足。その後、放射性セシウム濃度の指標値が厳しくなったこともあり、昨年9月末現在ではさらに増えて189万本が足りなくなりました。



植菌用の種駒を埋め込む穴を開ける機械。曲がりや節がない福島県産の原木が機械加工に向いている

とにかく困った。うちでは北は岩手から西は島根まで、原木を集めるために奔走しましたね。大分で2万本、島根で1万本といった感じで各地から集めました。それでも昨年は例年より約8万本足りなかった。それに、福島県産に比べれば質が劣る上、供給不足で価格が高騰している。1本当たりの平均価格は原発事故前に比べて100円ほど上がり、現状は280円ほどでしょうか。今年に必要な量が何とか集まりそう。ただ、それも風評被害で需要が減っている

原木シイタケで経営をする農業者にとって、福島県の森林はなくてはならない存在だ。阿武隈山系を中心とした山々では戦後から、専門的な集団が良質な原木を生み出してきた。県境を越えて供給される原木の量でも全国の4割を占める一大産地だ。それが東京電力福島第一原発事故によって、県内の森林は放射能に汚染された。いま、美しく手入れがされた里山から木を切り出す音が聞こえることはない。その原木を使い続けてきた農業者はどうしているのか、茨城県つくば市の(有)なかのきのこ園



“被曝農業時代”を生きぬく



セシウム低減へ洗浄機を試験

ので、例年より少ない20万本も集まれば十分です。

原木シイタケでも風評被害が出ているように、消費者は敏感になっている。検出される放射性セシウムを少しでも減らそうと、飯泉さんは原木を洗浄する機械の開発を試みる。

農機メーカーの高橋水機（埼玉）に依頼して、ダイコンの洗浄機を改造し、それを2台つなげて洗浄工程を長く使っています。工程が伸びた分だけ水で洗っている時間が長くなり、放射性物質がよく落ちるからです。入口からローラーで送り込みながら、その途中で水を吹きかけていく原理。これを2組用意し、1日当たりの処理能力は1000本ほど。洗浄した原木からは国の指標値を超える放射性セシウムが検出されることはありません。また、洗浄に使った水は濾過して処理しているので、指標値以上の放射性セシウムは不検出です。

困ったのは水の確保でした。何しろ1本を洗浄するのに、80〜100ℓの水量が必要なんです。洗浄のため外界と隔離するため用意したハウスの横に、わざわざボーリングして地下水をくみ上げています。そのため電気代も毎月7、8万円ほど



原木の洗浄機



洗浄機の内部。水圧で放射性物質を落とす

が気になっているのは汚染された里山である。原木シイタケの生産とは切っても切れない間柄であるからだ。

重要なのは、原木となるコナラやクヌギを定期的に切り出すことが、里山の保全にもつながることです。私たちは仲間4人で年間42万本の原木を福島県から買っていました。10a当たりから切り出せるのは700本から800本。だから、我々だけで60ha以上の里山を保全していた計算になる。

木を切れば地面に光が届くようになるので、下草が豊富になります。これらは野生動物の餌になり、生態系を豊かにすることにも役立つと。もし木を切らなくなれば、いま以上にナラ枯れ病が蔓延するでしょう。伐採されずに太くなったナラ類の樹木は病気を媒介するカシノナガキクイムシの繁殖に適しているからです。日本人は戦後、薪や炭を利用しなくなり、里山が荒廃してきました。この上、原木も使わなくなれば、荒廃に一層拍車がかかることは避けられません。

原発事故で同じ悩みを抱える生産者らは2010年12月、「東日本原木しいたけ協議会」を発足させた。飯泉さんはその会長に就任。そして今月15日の会議で、ある構想を提案

する。「里山再生基金（しいたけ用原木山再生基金）」だ。

福島県を中心に東日本の里山は放射能に汚染されました。除染するといっても、まるで手が付けられないような広大さです。ただ、このまま放っておけば、我々原木きのこの生産者は経営を続けていけません。後継者にも多大な影響をもたらすことになりません。だから里山を再生する覚悟を決めました。資金の出資者は当然、まずは東京電力です。それから原木シイタケの生産者、森林所有者、林野庁、県、市町村。基金は汚染された里山の除染、安全な原木の育成などに活用します。基金は志のある方から募っています。多くの方のご協力をぜひお願いしたい。

東日本原木しいたけ協議会をはじめとして、飯泉さんは生産者だけでなく、森林所有者や消費者団体など多くの人々や機関を巻き込んで、原木シイタケの生産と里山の再生に取り掛かりました。次号でその詳細を紹介する。（続く）



里山の再生なくして原木栽培なし

原木を除染する一方で、飯泉さん

かかり馬鹿になりません。あまり多くの水を使えば、周囲の評判も良くないし、不経済です。だからメーカーと一緒に、濾過した水を貯めて、再び洗浄に使えるようなシステムを構築するつもりです。近く岩手、福島、うちの3カ所で実験を始めます。

「里山再生基金」の協力に関するお問い合わせは3月末まで飯の事務所を置く農事組合法人・森のめぐみへ。
☎0280(23)1961、または
ファクス0280(23)1962。
4月以降は本事務所を立ち上げる。